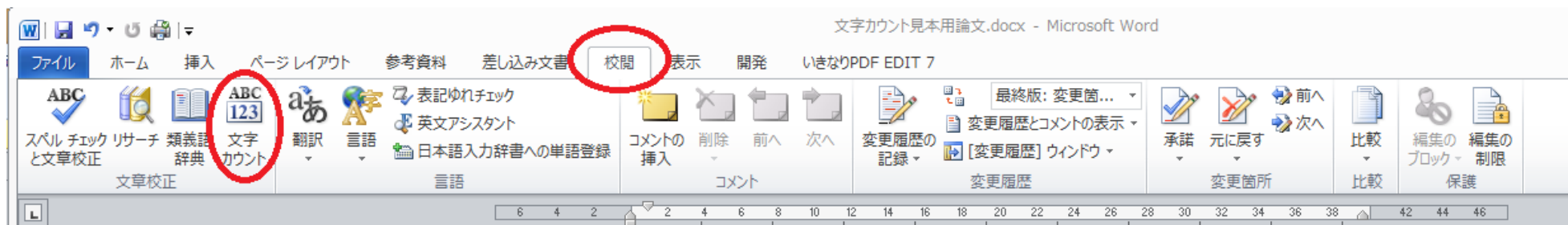


2019 年度 早稲田大学大学院文学研究科紀要掲載論文執筆要項（補足資料）

「和文・中文論文」「欧文論文」の場合の文字・語数カウント方法について

論文執筆にあたって、文字数の確認は Microsoft Word の「校閲」⇒『文字カウント』機能を使い、「和文・中文」「欧文」に従って下記の計算式に当てはめて各自でご確認ください。



「和文・中文」論文の字数カウント方法（全角基準）

$$\textcircled{2} + \frac{\textcircled{1} - \textcircled{2}}{2}$$

右の論文例の場合…

$$\textcircled{2} 12,959 + (\textcircled{1} 16,119 - \textcircled{2} 12,959) \div 2 = 14,539 \text{ 字}$$

「欧文」論文の文字カウント方法（半角基準）

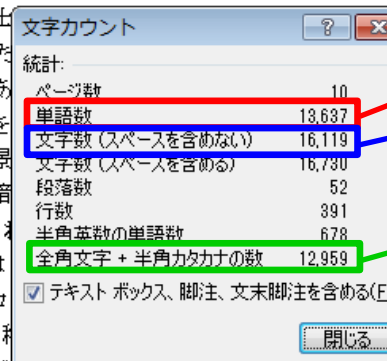
<字数>でカウントする場合

①文字数（スペースを含めない）+ ②全角文字+半角カタカナの数

<語数>でカウントする場合

③単語数 のカウント数そのまま

まずはプルースト自身が映画をどのように認識していたかを確認しておこう。周知の通り、プルーストは映画についておよそ芳しい意見は持っていなかった。そもそも長大な『失われた時を求めて』の全編を通じて、文学、美術、音楽、演劇などの諸芸術が盛んに論じられる中で、映画への言及がなされるのはわずか3回にすぎない。最初は第2編『花咲く乙女たちのかげに』の第1部「スワン夫人をめぐる」の末尾で、大通りを散歩するオデットに乗馬を楽しむ紳士を撮った「さながら映画に撮ったとき」においてであつた。ところが、この場面が意に消されてしまう情景場内のような謎めいた暗いものであった。2と語り手は、また前者については、マイブリッジによる「クロム」もしばしば指摘され、本稿それなりに興味深い記述ではある。しかし、プルーストが映画について抱いていた認識が



③

①

②